

川口→横浜へ！



よみがえ

蘇った昭和の名車両

京急デハ230形デハ236号

かつて川口で保存・展示されていた鉄道車両が往年の姿を取り戻し、新たな場所で皆さんと再会できることになりました。

デハ236号の歴史

- 1929年(昭和4) 湘南電気鉄道デ1形デ6号として落成
- 1948年(昭和23) 京浜急行電鉄デハ230形デハ236号に改番
- 1978年(昭和53) 定期運転終了
- 1979年(昭和54) 川口市が譲渡を受け、青木町公園の児童文化センターで展示
- 2003年(平成15) 児童文化センター閉館に伴い、内部の公開終了
- 2016年(平成28) 京急電鉄へ再譲渡決定
- 2017年(平成29) 川口市から横浜市の総合車両製作所へ搬出
- 2019年(令和元) 車両の修復が完了
- 2020年(令和2) 横浜市の「京急ミュージアム」で展示

たの郷ハ236号は故郷へ帰っていただきます。



ある白帯を巻いたデハ236号は、当初は車内に入ることも可能で、川口の子どもの人気の的となりました。しかし、児童文化センターが閉館すると、青木町公園に残されたデハ236号は年々劣化。あわや解体という中、再び獲得の名乗りをあげたのが京急電鉄でした。平成29年、38年間展示された川口に別れを告げ、デハ236号は故郷へ帰っていただきます。

赤い車体は大人気



物と技術のまち」川口にやってきた。

今から約90年前に誕生したデ1形(後のデハ230形)は当時としては画期的な構造で大幅な軽量化を実現し、戦後の電車の速度向上にも影響を与えた昭和の名車両です。眺めのよい大きな窓も特長で、48年にわたる川崎や横浜、横須賀をさっそうと駆け抜け、昭和53年に引退。役目を終えたデハ230形の中の1両、デハ236号が、関係者の協力で「鑄物と技術のまち」川口にやってきた。

昭和の電車づくりの原点

たくさんの想いを乗せた復活

京急電鉄は、デハ236号を修復し、再び展示することにしました。驚いたことに、外板はかなり傷んでいたものの、欠損した部品はほとんどない良好な状態でした。とはいえ、昭和初期に製造された車両の修復は大変な作業となりました。

京急電鉄の社員だけでなく、関連会社やかつてデハ230形に携わったOBなど、多くの人々が力を合わせて丸2年、デハ236号はついにその勇姿を取り戻しました。そして、1月に横浜市のみなどみらい21地区にオープンした「京急ミュージアム」の看板車両として、新たな「車生」を歩み始めたのです。



車両も想いも大切に

京浜急行電鉄(株) 鉄道本部 運輸営業部 飯島 学 氏



いよいよデハ236号が帰ってきました。これまでに川口の皆さんに大切にしてください。大切にしたいと思っています。

私たちは本当に多くの川口のかたがたから、子どもの頃にこの電車遊び親しんだという話を聞きました。これからも、多くの子どもたちがこの電車に親しんでくれるでしょうし、そうした想いを大切にしていきたいですね。

横浜に来る機会がありましたら、デハ236号にもぜひ会いに来てください。お待ちしております。

◇京急ミュージアム
開館時間：10時～17時
定休日：火曜日など
※無料(一部有料コンテンツあり)
※詳細はホームページをご覧ください。